

この素晴らしい世界で幸せを！

現実逃避したい！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公佐藤拓武は基本的に能力は全て高いのだが、運がとてつもなく低かったため、もとの世界でコンビニで買い物をしてる時強盗事件に巻き込まれ、コンビニの店員をかばい死んでしまう。そして、女神アクアによって異世界を救うため何でも上手くいくという能力を授けられ転生した。そんな感じで異世界を救っていく感じですよ！原作でも登場しているカズマ、めぐみん、ダクネス、アクアも登場！これから多分キャラ増えます！

目次

第1話

1

第2話

5

第1話

あれ？気がつく俺は何故か薄暗い部屋の椅子に座っていた。

ここはどこだと思った時思い出した。俺はあの時コンビニの店員をかばって死んだのか。

「はー疲れた、アイスでも買おつと」俺がアイスを手に取りレジに向かうと、

「おい、殺されたくなければ金を出せ！」どうやら強盗のようだ。

さすがにこういう場面に出くわすのは初めてだ。

「いますぐお持ちしますので

」どうか落ち着いてください。お願いします」。

店員が強盗を落ち着かせようとすると

「なら、とつとと金用意しろ！」

と言われ店員は金をレジから出すふりをし、警察に通報するボタンを押して通報した。

その瞬間「お前警察に通報したな、殺してやる！」と言い拳銃を店員に向け

「バーン」。辺りに銃声が響いた。

俺の血が辺りに飛び散り、だんだん意識が薄くなってきた。

そして俺の意識は途絶えた、

そうだったなーと振り返り前を見ると人とは思えないぐらい綺麗な女性が椅子に座っていた。もう綺麗なレベルを余裕で越えている！あれはきつと女神だ。俺はそう思った。

するとその綺麗なレベルを越えた女性は

「ようこそ死後の世界へ。私はあなたに新たな道を案内する女神。佐藤拓武さん、辛いでしょうが、あなたの人生は終わったのです。」

俺はいくつか気になることがあった。

「俺がかばった店員はどうなったんですか？それとその後犯人はどう

なったんですか？」

「あなたがかばった人なら無事でしたよ。それと犯人は駆けつけた警察官によって取り押さえられ警察署に連れて行かれました。」

俺がかばった人が死んでしまったら俺が店員をかばって死んだ事が全くの無意味になってしまうからだ。

すると女神が

「あなたの死因も聞きます？」

と言われたが俺は首を振った

もうあの今まで味わった事のないほどの痛みを思いだしたくなかったからだ。

「すみません、女神さん。俺がかばった店員はどうになりました？それと犯人はどうなったのですか？」

「あなたのかばった店員は無事ですすよ。その後警察によって犯人は取り押さえられ、警察署に連行されました。」と言われたので俺はほっとした。

だって店員かばって死んだのに店員も死んだら意味ないし、ただの無駄死になるからな。

それにしても俺はこれからどうなるのだろうか。天国行くのかな。天国行ったら毎日楽しく暮らすぞとか考えていると

「あなたには3つの選択肢があります。1つ目は記憶を消してもう一度人生をやり直す。2つ目は天国」に行くと言おうとしたが、

俺はそれより早く

「それにします！」と言った。

当然だよねと考えていると

「まだ3つ目があるから最後まで聞いてよ。」

と言われたがそんなのはどうでもいい。

「天国をお願いします」と即答した。
すると

「天国って言うのはねあなた達が想像してるような楽園みたいな場所ではないのよ」

え．．．．． そうなの．．．

「まず肉体がないから永遠にひなたぼっこしたり、他の人と雑談するぐらいしかやることがないのよ。だからあなたが大好きな運動やゲームなんて無いし、もちろんエッチい事もできないわよ。それでもいいならいいけど」

俺は体育系だ。

だから一生ひなたぼっこや、雑談だけして過ごすなど無理な話だ。

俺は3つ目の選択肢を聞くことにした。「3つ目は異世界に転生して魔王を倒す」

「え？今何て言いました？」

「異世界に転生して魔王を倒すといったの」

魔王がいる世界とかゲームの中でしかありえないと思っていた。

ところで何でわざわざ転生させてまで異世界に人を送るんだろう。

色々考えてると

「今あなたなんでその世界にわざわざ他の世界の人を転生されるんだろう？」「その世界の人が魔王の人が倒せばいいんじゃないかなとか考えてたでしょ」

この女神俺の思考読みやがった。

「理由はね！まあそのほら異世界で死んだ人達ってだいたい魔王軍に殺されてここに来るわけだからみんなトラウマ植え付けられているの」

「だからみんな生まれ変わってまた生き返るのを拒否して天国にいつてしまうのよ。」

「だからだだでさえ人口が少ないのにこのまま減っていくとその異世界の人類が減びてしまうから地球のほうからわざわざ転生させてまで補充してるわけ。これが理由よ。」

え．．． 無理じゃね？

俺転生しても絶対死にそう。

すると女神が、

「多分そのまま行ってもすぐ死ぬから1つだけ最強の武器とか異世界でも即戦力になる能力を授けるわ。」

と言われカタログを渡された。

そこに載っていたのはチート並みの攻撃力を誇る剣や、神的な能力がずらりと載っていた。

どれもすごすぎる。正直どれにしたらいいのかわからないぐらいどれも凄い。

俺が迷っていると女神が本性を表した。

「ねー、早くしてくれろ？次超死んだ理由が面白いやつが来るからストレス発散して楽しみたいの。」

こいつ本当に女神かなと思った。そうだ、こいつは駄女神だ。

「酷い女神もいるなー。あいつ完全なる駄女神だ。」

「なんですって!!!とつとつとしてよ。あんたなんかとつとつと異世界に送ってやるわよ。だからとつとつとチート能力決めて!」

「はいはい、わかりましたよ、駄女神さん。俺は何もかもがうまく行く能力にする。」

「じゃ、その魔法陣に立って。とつとつと異世界に送ってやるわよ。」
そして俺が魔法陣の上に立つと俺の体がどんどん上上がった。

「おい、駄女神お前は絶対異世界に落とされる。」

駄女神が何か言ってるが無視。俺は光に包まれた。

第2話

前回までのあらすじ

俺はコンビニの店員をかばい銃で撃たれ死亡。

その後死後の世界で駄女神に会い異世界に転生することになり、なんでもうまくいくという能力をもらった。

そして俺は光に包まれた。

目を開けるとそこには俺の住んでいた世界とは全く違う異世界が広がっていた。

中世風の町並みが広がっていて、ビルやマンションなんてひとつもない。

町では聞いたことのない言葉が飛び交っていた。でも何故か何を言っているのか理解できた。

多分あの駄女神のおかげだろう。

俺はとりあえず辺りの人にこの町の情報を貰うことにした。

あの人に聞いてみよう。

「あのー、すみません。俺冒険者やりたいんですけどどこに行ったらいいのか教えてもらえるとありがたいのですが。」

「この道突き当たりまで行って、右に曲がってすぐのところ冒険者ギルドがあるから、そこで冒険者になる手続きが出来るよ！」

「ありがとうございます！」

「あ、そうだ！登録にはお金が必要だけど君持ってる？」

俺は財布を見た。すると日本のお金は入っていないかった。

その代わりにこの世界のお金らしき金貨が入っていた。
すると

「それ100万エリス金貨じゃないの。それがあれば登録金は全然足りるね！」

それじゃあ頑張っつてね！私は用事があるからもう行くね！」と言って銀髪の方はどっかに行ってしまった。

「まあ、冒険者ギルド行ってみるか！」

そして、俺は冒険者ギルドに向かった。この世界見たところ平和なのになんで転生されられたんだらうとか考えながら歩いてると、なんかでかい建物が見えてきた。

あれかなーと思いつつもドアを押した。その瞬間酒の匂いがしてきた。

何かすぐ絡んできそうなやつがたくさんいるけど、あれが冒険者かな?と考えていると

「いらしゃいませ!注文ならその席に座って下さい!お仕事案内ならそのカウンターまで!」

よし、とりあえずカウンター行こう。

「すみませくん!冒険者登録したいのですが。」

「はい!登録料に1000エリス掛かるのですがよろしいでしょうか?」

「はい!」

そう言つて俺が100万エリス金貨を差し出すと

「あのお、申し訳ないのですが1000エリ銅貨とかないですか?100万エリス金貨だとさすがにお釣りがとても多くなってしまうのですが…」

「すみません。これしかありません」

「…」

「あの一…」

「そつ、そうですか。分かりました。100万エリスのお預かりなので、99万9000エリスのお返しです。」

まじか…。あの金貨一枚でこんな価値があるのか。

お釣りが多すぎたため、俺のサイフに収まりきらず、サイフに入らなかった分はバックに入れた。

「では、その魔道具に手を置いてください」

「はい。」

俺は言われた通りその魔道具に手を置いた。

すると、その魔道具が動き出し、終わると何やらカードが出てきた。すると受付のお姉さんがそのカードを手に取り、

「はい！えーつと佐藤拓武さんですね。」

すると、受付のお姉さんがとても驚いた表情をしていた。

「あの一、どうかしましたか。」

と俺が聞くと、目をキラキラさせて、

「すごいです！ほぼ全てのパラメーターが並みの人の20倍ほどあり、その中でも運だけが計測不能になっています！計測不能など初めて見ました！職業は何でもなれますよ！アークウイザードにクルセイダー。ソードマスターにアークプーリスト。それとオールマスター…あれ？この職業は聞いたことが一度もないのですが」

「じゃあ、それでお願いします！」

すると、ギルドで働いている人達が全員、

「今後ともあなた様の活躍をギルド一同期待しております！これからよろしくお願い致します！」

あれ？これって駄女神からもらった能力の効果なのかな？

すると、酒を飲んでいた冒険者達がぞろぞろ集まって来て、

「すつげー！兄ちゃん！ところでパーティー決まってるなら俺のパーティー入らないか？」などとパーティーに勧誘されたが断った。まだこの世界に慣れてないし、とりあえず、自分がどのくらいの強さか知りたいしとか考えながらギルドをあとにした。

「とりあえず泊まる場所探すか！」

とりあえず、泊まる場所がないと困るしなとか考えてるといい感じの泊まる場所を見つけた。

カウンターに行き、

「すみませーん！一人用の部屋取りたいのですが？」

「はい！一人用の部屋ですね！7000エリスになります！」俺はバッグの中から1000エリスの銅貨を7枚取りだし、受付の人に渡した。

「ちようどお預かりします。ありがとうございます。では鍵を取ってくるのでお待ちを」

と言われ、数分後鍵を渡された。

「部屋番号は105になります。ごゆっくり。」

と言われ部屋に向かった。

「はー、疲れた。いろいろありすぎて頭が着いていけない。」

ベットに横になり、俺は何となくバックから冒険者カードを取り出し、職業の説明の場所を読み始めた。

オールマスター。並みの人ではなれず、少なくとも全てのステータスが普通の人の10倍無くてはならない。最弱職冒険者の用に全ての職業のスキルを使えるが、魔法など全てのスキルが本職を遥かに上回る威力を誇る。この世界で最高峰のスキルと解説には書いてあった。

俺は思った。このスキルはチートだなと。